

月例研究会（2016年12月14日）

The International Association  
of Labour History Institutions  
(IALHI)  
第47回ヘルシンキ大会について

榎 一江

本報告は、2016年9月7日～10日に開催されたIALHI第47回ヘルシンキ大会について、IALHIと大原社会問題研究所との関係を振り返り、今大会で得られた知見を提供するものである。研究報告を行う通常の月例研究会とは異なるものの、今後の国際交流のあり方やアーキビストの必要性など研究所の抱える諸問題について率直な意見交換を行う良い機会となった。

労働史研究機関国際協会（IALHI）は、1970年にヨーロッパで創設された労働関係文書館のアーキビストの集まりである。大原社会問題研究所の加盟は、事務局があったイギリス労働党文書館のアイリーン・ワグナー女史に留学中の二村一夫専任研究員がすすめられてのことであったという。1977年の第7回ミラノ大会に二村専任研究員が出席し、1978年に大原社会問題研究所が加盟した。以来、日本で唯一の加盟機関となっている。

事業報告によると、二村専任研究員は1989年の第20回アムステルダム大会、1990年の第21回ヘルシンキ大会に出席し、文書館におけるコンピュータの利用についての研究会等に参加したほか、フィンランドの文書館の現状を視察している。その後、しばらく大原社会問題研究所からIALHIへの参加はなかったようだが、2001年の第32回タンペレ大会（フィンランド）に留学中の五十嵐仁専任研究員が参加した記録がある。今回の参加はそれ以来のこととなるが、

偶然にもフィンランドとは縁があるようである。

今大会のテーマは、Heritage of Social Movements in a Global Perspective - Collecting and Preservation of Sourcesで、大原社会問題研究所を含む17機関からの報告とナミビアとメキシコをフィールドとする2つの基調講演があった。報告したのは、日本、ドイツ、フランス、イタリア、ベルギー、スウェーデン、オランダ、ネパール、ロシア、スイス、フィンランド、アメリカの加盟機関で、各国の取り組みを直接聞くことができたのは大きな成果である。各機関が所蔵するのは紙媒体の資料が中心だが、その関心がデジタル問題に集中していることも印象に残った。ウェブサイトやEメールを収集するいくつかの取り組みは、今後も注視していきたい。

なお、イタリアのArchivio Biografico del Movimento Operaio (ABMO)のMassimo Repettoさんは、コミンテルン100年を期して、大会に各国から参加した人々の評伝を集めて刊行するプロジェクトについて報告したが、20か国60人以上の研究者が関わるこのプロジェクトにぜひ日本も参加してほしいとの要請を受けた。後日、正式な依頼を受け、大原社会問題研究所として、日本人参加者に関する記事を日本語と英語で提供することになったが、このような共同プロジェクトにも積極的に対応できる体制づくりが必要となるであろう。

最終日は、タンペレへのバスツアーが企画され、レーニンミュージアムと労働博物館を見学することができ、充実したプログラムであった。2017年の第48回大会はベルギーのヘントで開催され、Amsab-Institute of Social History主催でデジタル技術をテーマとするものになる予定である。引き続き、大原社会問題研究所から参加者を出すことが出来ればと期待している。（えのき・かずえ 法政大学大原社会問題研究所教授）